

「国語の力」の成立過程 Ⅲ

— 国語教育學說史研究 —

野 地 潤 家

七

「国語の力」の成立過程において、ヒューイ (Huey, E.B.) 著「説方の心理と教育」(The Psychology and Pedagogy of Reading, 1910) 「明治43」のはたした役割は大きい。

右の書物のヒューイの述べた部分からの引用については、すでに考察した。「国語の力」には、ヒューイの書物からの、ヒューイ以外の研究者からの引用もすくなくないかと思われる。いま、それらの引用状況を見ると、つぎのようである。

(一) スクリプチュアから

1 「こういろいろの实例を考へる時に、スクリプチュアが『言語は多くの声音の連続であつて、文字はその連続の目だった点を不完全に現わしたものに過ぎない。』という学説を思い浮べる。

特に漢字と仮字と結びついた不完全な表記法を透して文を説む我々に於ては更にその感を深くするのである。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二六 解釈の着眼点(三) 七四六)

1 「スクリプチュア教授は、其の著実験発音学原論(Elements of Experimental Phonetics)に於て次の如き事を見出し

て居る。(中略)『一つの語は、音の無限数の継続的一連である不完全な仕方にて、文字は之の一連の内の或る特質的点より以外のものを示すものではない。』一つの母音の音でさえ、歌う場合ではないが、話す場合には其の調子が常に異ると云う事が見出されたのである。」(木下一雄訳著「ヒューイ説方の心理学」第六章第六節 発語の生理 一五一—一五二六)

2 「スクリプチュアが辞は文字・綴語・詩脚というように断片的に分つことのできない流動であるといった如く、一語々々はその流動の一つの勢を示すものであるから、たとへば、『をしむ・ござんなれ・にくし・乞へ』というような場合に於ても、その語の含む意味よりも、いろ／＼の複雑なる感情が纏つて居る意味を示すものである。」(有朋堂版「国語の力」四 文の律動 九 内辞に於ける単語 一九三六)

2 「實際スクリプチュア教授は、次の様な事を断言している、即ち『実際の場合を代表しないところの、純粹に任意な方法に於ける場合を除くは、発語は聴覚的及び自動的精力の流れであつて、文字、シラブル、語、脚等フットの如き、区々たる断片に分割される可能

性は何等伴わないのである。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第六節 発語の生理 一五三六)

(2) エッジャーから

1 「エッジャーが、読むということは、文字の連続を辞のspeechに翻訳することであると謂ったように、文の形を見、その各部分に明にすることは静的な見方である。もしそれを辞に翻訳すれば文自体が動的に現われ、作者の心情の律動が文の上に現前すると共に、この点から文の解釈、言語の更正せらるゝ場合が少くない。」(有朋堂版「國語の力」一 解釈の力 二六 解釈の着眼点(三)七三六)

1 「そして常に大部分の読者にとっては、『読むと云う事は事実書き物を言葉に翻訳することであると』、吾々はエッジャー氏と共に言い得る。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第二節 内部的発語の心理 一三七六)

(3) ツァイトラー、ゴールドシャイダー、ミユラーから

1 「(前略)『読む』という作用が文字から内に内にと深まっ
て行く時の、作用の起頭がありくと見える。ツァイトラー、ゴールドシャイダー、ミユラー等の文字の知覚と聯想との研究は、この機微を捉えて釈明を試みたものである。ものゝ終と始めとは明に見えるが、終から始に移る境は見つけ難いものであって、精緻なる観察と思索とに須たなければならぬ。」(有朋堂版「國語の力」二

文の形 一 文の形と想の形 八七六)

1 「ゴーズツシャイデル及びミユラー氏は、無意味文字、綴字、語、句等の一連を眼の前に曝した。そして彼等は次の事を見出した。即ち語の『視覚的記憶像』はその語の文字の不完全なる連続

に依り容易に喚起された、曝された語の中に表れた場合には、或る種の文字は無視されたのであった。或は或る種の文字は省かれるでもあろう。そして、認識はより容易に表れるであらう。或る一定の語の認識を決定するに至って、特に使用される如く思われる文字は『決定的文字』(determining letters)と云われた。其の他『無関係文字』(indifferent letters)と云われる。無視された、又は欠如したる文字の場所は、曝しがなされた場合に、主観的に満されるであらう。時としては正しい文字が実際にそこにあつても間違つた形に依つてそこに見出されるであらう。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第四章第四節 語句の知覚 八三—八四六)

1 「意味を有する章の露出に於て、多くのものが読まれた場合、ツァイトラー氏は次のことを発見した。或る支配的『綴り音、集合物』(syllable complexes)——普通語の意義を有して居るものであるが——は統覚された。そして残りのものは聯想的に補充された。もしも最も親しい文が眼の前に曝された時には、そこには支配的の文字がある。そして時としてはこの支配的の文字の知覚は、全文の認識に充分である。文の『無関係なる』語に於ける変更は、若しくはその欠如は注意されずに終るのであろう。文は同様に同化されるのである。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第四章第五節 文の知覚 九〇六)

2 「前節にツァイトラーやゴールドシャイダーやミユラーの文字の知覚と聯想との関係の研究を一言したが、文字に現われた文の形に囚われないで、想の形を捉える心理はこれ等の人々の盲人の説方の研究に就て見ることが出来る。盲人が点字を読む時には右手の指で単語の全形を調べ、左手の指で文字を辿りながらその一部分を

探ぐると、残りの部分を直下に感じて了う。かくのごとく一語の著しい部分を感じたら、直ちに全語を知るといふ事実から、知覚と聯想との關係の電光の如き力を見た。」(有朋堂版「國語の力」二)

文の形 三 盲人の説方 九二—九三(六)

2 「之等の著者の意見に依れば盲人の説書は、語を知覚する場合に行うこの方法の組合せを例証する様に思われる。突起した文字の頁を読む事になれた読者は、語の大体を調べる為に右手の指を進める。然るに左の他の指は、文字の上を連続的にすべり乍ら、それに從つてゆくのである。然し普通には指が点にふれずに文字の上を通じてゆく間に、文字の一部分のみが調べられるのである。賢明なる者として注意深い言の読者は、彼等が斯くして文字の一部分のみを読む、他は之を推則すると云う事を云つて居る。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第四章第四節 語句の知覚 八七—)

(4) クアンツ、デイヤボロン、アペルらから

1 「又、発音の声音的訓練に於て文の解釈の力を増すことができるということも強ち認められない。クアンツ、デイヤボロン、ヒュエイ等の実験に依れば、発音法も、黙読法(唇を動かして)も別に文の解釈に注意を集中する力とはならぬのである。」(有朋堂版「國語の力」四 文の律動 二〇 視説の音感 二二三—二二四)

1 「説書に於ける口唇の使用は、注意の集中或は理解を助ける者としては見出されなかつた。尤もそれは注意の集中の結果として、屢々生じたのであるが。一般に口唇の運動は説書の速度に対する大なる障害であると見られた。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第九章第二節 説書の最大限度と障害 一九八—)

2 「私のこれまで中等学校に試みた多くの記録から得た平均は、一分間に二五〇—三〇〇字というわかり易い数字に翻訳することができる。(クアンツ、デイヤボロン、ヒュエイ等の実験もあるが、我々の場合に直ぐさま移すこともできず、又その研究も充分なものではない)。」(有朋堂版「國語の力」四 文の律動 二一 通説の速度 二二九—)

2 「デヤボン氏は、多数の読者の説書率を試験した結果、説書物件の或る種類に対しては、最も速い読者は最も遅い者よりも三倍早く読むと云う事を見出した。彼は又三人の大学卒業生を試験した。

一人は中等学校の教員、最後の一人は心理学者であつたので、実験は文学及科学から抜粹せられたる各種類の説書物件に対して行われたのである。之等三人の各々は、異つた種類の説書物件に対し、極めて異りたる説書率を有して居つた。

然し乍ら、彼の最も興味ある問題に於ける最も速い読者は——之の場合には数学者であつたが——全ての種類の説書物件を最も速く読んだ。中等学校の教員は全ての種類の説書物件に対しては、数学者より遅く読んだ。

そして心理学者は、一種類のものを除く、他の全ての説書物件に於ては、なお遅く読んだのである。デヤボン氏は之の材料から結論を下して次の如く云つて居る。「説書物件の一定の型及び種類に対し、速かに読む者は或る認められたる制限内に於ては、説書物件及び型の性質如何に拘らず、遅い読者よりは幾分比例的に速く読むであらう。」と。(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第九章第四節 説書率の条件 二〇二—二〇三、)

2 なお、説書の速度に関しては、第九章説書の速度(「ヒュエイ

イ読方の心理学」一九四二〇七）に述べられ、クアンツのこと
も引用されている。

3 「而して普通の音読に於ては一秒間二・六対三・九の個人差
であるが、クアンツがウイスコンシン大学生五十人に試みた視読速
度実験は一秒平均三・五対八・八、最高速度に於て三・五対十二・
二語の差を示して居るように視読に於ては（発音作用の意識から解
放された）かような個人差を示すのである。而して達読者は遅読者
よりも記憶（再現）が正確であるのみならず原文に書いて無いこと
をも導き出す余裕のあることを示して居る。こうした達読者の多
くは、『唇を動かすこと』（読方の注意集中法として考えられて居
る）に馴らされて居る人や、『発音法』に馴らされた人ではない。
却ってそれ等は、達読を妨げるものであることを示すのである。却
てクアンツが『視る力』を以て速度の根柢とした学説に首肯され

る実例が多いのである。」（有朋堂版「国語の力」 四 文の律動
二一 通読の速度 二三〇―二三一）

3 「ジェ・オー・カンツ博士は、ウイスコンシン大学の最高級
及び初年級の学生五十人に就き、読書に於ける彼等の普通なる、及び
最大限の率を決定する為に試験を行った。尚次に読書率が依存す
る要素及び条件を決定する為に、彼等に就て実験を行った。彼の試
験した読者は、最も遅い者の一秒三・五語と、最も早い者の一秒八
・八語の間に於て異つて居った。

但し読書は普通の速度で行われたのである。最大の速度では、率
は一秒三・五語より、一二・二語の間であった。之は黙読の場合で
あった。普通の速度で声を出して読む場合には率は一秒二・六乃至
三・九語の範囲内であった。一般に普通の速度で早く読む人は、最

大限の試験に於て優勢であった。そして遅い読者は一般に、普通の
速度及び最大限の速度の両方に於て遅かった。

読んだものを再現する能力を試験して彼は、次の如き事を見出し
た。即ち早い読者は、平均三十七パーセントだけ、その働きの質に
於て、遅い読者よりは優つて居ったと云う事である。『速い読者の
優越は、又彼の読書の内容の記憶が、遅い読者のそれよりもより正
確であった。』と云う事実に依つても示される。彼は最初の拔萃に於
て、見出されなかつた思想の三分の二だけを導くのである。

読書に於ける口唇の使用は、注意の集中或は理解を助ける者とし
ては見出されなかつた。尤もそれは注意の集中の結果として、屢々
生じたのであるが。一般に口唇の運動は読書の速度に対する大なる
障害であると見られた。

従つて読書の才能に対する大なる障害であると考えられた。『十
人の速度の遅い読者は、十人の最も速い読者よりは約二倍の口唇の
運動を示した。』然るに『読書範囲の広い人々の中、誰れも見られ
得る程度に於て口唇を動かさなかつた。』『読書の範囲は口唇の運
動に反対に直接に働く。そして読書の範囲は中庸に口唇を動かす人
の間に於ける場合を除いては、實際的にはかかる事を行うところの
只一つのものである。』（木下一雄訳著「ヒュエイ読方の心理学」
第九章第二節 読書の最大限度と障害 一九七―一九八）

3 「視覚的型の人には、『聴覚的型の人よりも極く少し速い読者
である。』と云う事を、カンツ博士は見出した。色、語或は円、正
方形、菱形の如き幾何学的形態の速かなる認識に於て示されたる、
視覚的知覚の迅速と云う事は、『或る人の読書率を決定するに當
て、一つの重大なる要素』である事がわかつた。速い読書に寄与す

ると假が考えた全ての要素を考えた結果、其等の要素は『その重要な程度に従って列べると』次の如くである。『視覚的知覚、小児時代のからの読書の練習、集中力、最初の構成の迅速さに依って見積られたる精神的注意、学校の成績に依って示さる如き学者的能力』の順である。之等の結果は実験したる読者に対し、普遍的であった。

そして特種なる確証としては、実験した全ての読者の速度より遙かに速い読書をなした人は、速い読書に関する上記条件の全てに対し、実際著しく卓越して居った。読者が遅いか、中庸か、又は速い読者であるかと云う事に関して、彼等自身が行った判断は、後に示す如く、カンツ博士の速度に関する試験の結果と、極めてよく一致すると云う事は興味ある事柄である。』（木下一雄訳著「ヒュエイ読方の心理学」第九章第三節 読書率と知覚型 一九九六）

4 「アベル、クアンツ等の記録は、遅読者が一語一語を辿るのに、速読者は一目の下に節・句・もしくは文全体を窺取するのであって、それは全く明敏なる理解力と聯想力とに依るものであることを示して居る。」（有朋堂版「国語の力」 四 文の律動 二一 通説の速度 二三一—二三二）

4 「一八九四年十月の Educational Review に於て、アデライド、エム、アベル嬢は、ウェルズレイ大学の女学生四十人の、読書率に関する実験を報告した。その実験は、コルキンス教授の指導の下に行われたのである。女学生等は、授業が始まる少し前に、或る一定の時間、短い物語りを讀んだ。そして読書の時間を計った。

因みに此の女学生達は、実験の目的を知って居なかつたのである。授業が始つた時に、その女学生達は、記憶に依って出来るだけ逐語的に其の物語りを書いた。

最も遅い読者は、其の読書に於て、最も早いものよりは六倍の時間を要したと云う事がわかつた。この再現試験は、読書後極く短い時間の後行われたものであるからして、それは記憶の試験と云うよりは、寧ろ理解の試験として考えられた。之の結果は次の様な事を示して居る。即ち大部分の読者は『比較的遅い事に依って、効果を得た。』『しかし二人の者は迅速及び理解に於て、他の者より優つて居た。』

そして之等の読者は、読まれる物が不明瞭である場合を除いては、『彼等は其の思想を、速かなる読書に於て、より容易につかむ事が出来る』と云う事に一致した。『早いのと、中庸のと、最も遅いとの之等読者の三種別の中、或る者は充分、他のものは可成り、又は貧弱に理解した。』この事は『理解は絶対的読書率に無関係である』と云う事を示して居るものである。

然し乍らアベル嬢は大体に於て早い読書は必要的に理解を減少すると云う様な事なしに時間を節約すると云う事を見出した。彼の女は読書率は『聯想の速度の増加、聯想の反復及び倍加、興味及び注意の緊張』に依りて増加せしめられ得ると考えて居る。読まれる語の實際的、或は想像的発音は、遅い読書の『特質的心髓』である事がわかつた。

そしてアベル嬢は之を障害——習慣的である時には——及び子供の時に打勝ち得る一つの傾向と考へて居る。『私の実験した女子の内、遅い読者の他の一特長は、速い読者が一瞥で句を、クローズを、時には文をさえ握むに反し、遅い読者は或時間内に一語を讀むと云う事である。』と彼の女は附言して居る。『各個人は彼の理解及び聯想の自然的速さに依って決定された』各々の最大率を恐らく

有して居るであらうけれども、『一般の説書率を増加すると云う事は、或る程度迄は可能で、望ましい事である。』と彼の女は結論して居る。』（木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第九章第一節 説書率と理解 一九五—一九七頁）

（5）ヴント、ゼームスらから

1 「説書百遍意自通ということは、いつまでも交らぬ真理であつて、説方の極意はこの外にはあり得ないと信じて居るのであるが祝説に於てはこの真理に反きがちであり易い。故に祝説作用に於ける説方に於ては、その過ちを避ける工夫を必要とする。祝覚から神經に連る心理的過程は、音説から導かるゝ心理的過程とはもとより同一の作用ではない。これを心理的に分析すればヴントが文に対する時の心の動き方の初めを『暗室である画に向つて居る時突然一方から光がさしこんだら先ず初めに画の全体の形が現われて次第に部分々々が明に見えて来るように先ず文の形が見えて来る』といつたのは第一回の祝説に於て著眼しなければならぬ要点である。少なくともこれを捉えんとする意志によりて精神が統一せられて文字を凝視する時にこの心の据え方から説方が正しい方向に導かるゝということが出来る。（説方心理の研究に於ては多くの人人の心理を研究するのであるからその実験の結果はヴントやゼームスと意見を異にしたジューベルトなどの学説もあるがそれは説方のさまざまの心理現象であるので、その心理の中の孰れが説方の力を伸ばす正しい且つ自然の道程であるかという考察の前にはそれは一つの参考にはなるが説方の原則と見ることはできぬ）」（有朋堂版「國語の力」

一 解釈の力 九 実例の考察（二） 二四—二五頁）

1 「ヴントは前記の書（五六三頁）へ引用者注、Völker Psych

ologie（民族心理学）（vol. I）を指す。Vに於て次の如く言つて居る。即ち『私が文を始める瞬間に於ては、其の文の全体は全観念として私の意識の中に既に存在する』然し乍らヴントは附言して、文は其の場合は主たる輪廓に於てのみ感ぜられる。と云うのは文の構成部分は、最初は不明であり、発語が進むにつれて生じて来るものであるからであると言ふ事言つて居る。『この過程は複雑なる絵画を俄に明くして、見る如きものである。其の場合に於ては人は最初、其の絵の全体の一般的印象のみを受けるので、其の次に継続的に個々の部分を見るので、その部分は、全体に対する關係に於て既に見られているところのものである。』

斯くしてのみ吾々は、前に複雑なる文に反射される事なしに一つの複雑なる文に依つて、話す人が話を正しくしてゆくと云う事実を説明し得るのであるとヴントは考へて居る。』（木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第四節 語の發生学的考察 一四二—一四三頁）

1 なお、右の1のうち、ジューベルトが引用されているが、彼については、つぎのように引かれている。「（前略）へジュームスの図解についての説明の一部V、それから4を通じては、テンプルが最も強く現れるところの部分である。この流は其の初めよりも、其の終りに於て高く描いて居る。何故かなれば、内容を感じる最後の方法は、最初の方法よりも、より豊富であるからである。ジューベルト氏が云つている如く『吾々は、吾々が云わんと意味して居るところのものを、吾々が云つてしまつた後に於てのみ知り得るのである。』（木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第五節 文の本質 一四八頁）

2 「ヒューイが『文は思想の統一的表现である』といったのも
ヴァントが『文は総合的にして分解的なる過程である』とか『同時
的、継続的なる全体』であるといったのも、この作用を明かに示す
ものと考えることが出来る。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の
力 一〇 センテンス・メソッドの理論的基礎 三二六)

2 「而してヴァントに従えば、この文は『意識内に表れる全体の
その部分への分解』である。従つて文を作る事は分解的である。
何故なれば、それは全体の部分の分解であるからである。然しそ
れは又意識の焦点に於ける部分の継続的現出であると云う点に於
て、総合的でもあると彼は考えている。彼は付け加えて言つて居
る。『然し乍ら就中それは分解的過程であると。』(一)

更にヴァントは、文を全体として意志された『任意的行動』である
と考えて居る。事実それは複雑なる行為である。

けれども音節其の他の構成的運動は、他の統一的行为の構成的運
動と同じく、自働的に動くものである。吾々は『思想に方向を与え
る。』そして『必要な語は、それ自身吾々の中に流れ込むのであ
る』即ち『それ等の語は現に存在して居る全概念の影響の下に於
て、最初に刺戟された語に対する觀念 (word-ideas) より聯想的
に喚起されるものである。』心理的に考えられる時には、文はそれ
故に同時的全体であると同時に、継続的全体である——個々の第二
義的要素は偶然的には消失するであらうけれども、文の構成の各瞬
間に於て、文は其の全範圍に於て意識内に存在するが故に、同時的
であると云い得る。

そして他方、確定的觀念は逐次に焦点の中に表われ、他のものは
不明瞭になつてゆく。けれども全体はその意識内容に於て、各瞬間

毎に変化するが故に、継続的であると云い得る。」(二) (I^{vo}-
ker Psychologie, vol. 2. P. 286. (Ibid. vol. 2, P. 286, ff)
(木下一雄訳著「ヒューイ詠方の心理学」第六章第五節 文の本質
一四三—一四四)

3 「ヴァントが文を読む時の心を説明して、恰もこみ入った画の
上に、突然光がさしこんで来た時に、初はたゞ全体の印象のみであ
るが、それから全体との關係に於て部分部分が引續いて見えて来る
ように、文も初は輪郭が見えそれから初めには暗かった部分々々が
分つて来ると述べたように、文意はこれを示す『言語の縁暈』であ
り『輪郭』である。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二
五 解釈の着眼点 (二) 六九六)

3 「ヴァントは前記の書(五六三頁)に於て次の如く言つて居
る。(中略)「この過程は複雑なる絵画を俄に明くして、見る如き
ものである。其の場合に於ては人は最初、其の絵の全体の一般的印
象のみを受けるので、其の次に継続的に個々の部分を見るので、そ
の部分、全体に対する關係に於て既に見られて見られるところのもの
である。』(木下一雄訳著「ヒューイ詠方の心理学」第六章第四
節 語の発生学的考察 一四二—一四三)

4 「エルステルが『叫び』を文学の原型とし、ヴァントが言語の
起源説に於て、『叫び』をその根底とするように、言語の本質的な
る姿は、一類に於ても一語に於ても聴くことができるのである。
又ヴァントがラテン語の *amaui* 一語で一文である。これを示すの
にラテン語族では *ego habeo amatum. j'ai aimé* (余は愛せり)
という三語を以てするのであるが、今日我々の話す言葉は、こうし
た表現から発達したものであつて、我々の『文』というものも『長

い一の語』である。音の長い連続であるといわれるかも知れぬ。唯、表記法又は印刷の習慣からこれを一々に離して表わすために分析されたる一語一語の意識を生ずるのであるが、生きた語に於ては我々が書いたり印刷したりした文に見るように引離されたものでなくして、文自体に於て有機的に結合されたる全一である。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二〇 視読の音感 二二五)

4 「古代の言語に於ては、単一なる表現が屢々語及び文であり得た。ゾントは其の著 *Völkler Psychologie* (民族心理学) (vol. I. Pögl) に於て次の如く言っている。即ち『ラテン語の *canavi* は語であると共に文である。ローマ語は、この *canavi* と云う思想を三つの語に分ける。

即ち *A ego habeo amatum* の三語に分ける。これは仏語の *J'ai aimé* (私は愛した) を意味する。従つて或る方面に於て明かにより原始的発達程度の言語と、より発達をした言語とを他方に於て一つの同じ言語の初期のものと同後期のものとを比較して見るならば、各所に品詞の区別は其れ自身、語が属して居る全体から、語が徐々に分離する其の過程を示したものである。即ち全体とは、文である。——之は語に比較的大なる独立性を導き、之の語の独立の意味と同時に、語の文法的形態を固定せしめる過程である。文が語或は品詞の差異なく、シラブルの音の継続の中に話される言語が、今日存在している。或は換言すれば、その言語の中に於ては、文は一つの長い語であるとも云い得られよう。吾々の英語及び同類の言語は品詞等に分解した。

そして吾々の印刷の方法は、この分解の結果を極めて明かに吾々に意識せしめる。然し会話及思考の日常使われる話では、之等の

品詞は原本的な文全体中に機械的に内在する。而して實際的構造は吾々が次に知る如く、書かれた或は印刷された表現よりは極めて異なるものである。」(木下一雄訳著「ヒュエニ説方の心理学」第六章 第三節 発語の性質 一四〇—一四一)

5₁ 「『文の形』はさまざまの立場から(修辞学文法等) これをいろいろに命名することができるが、その本質的な同時的継続的全一としての形を見る時に、ゼームスが意識の連続を小鳥の生活にたとえたように、唯文の中に流動する『飛ぶこと』と『止まること』との交互に連続した意識の飛翔を見る。いろいろの思想は言語群の中に溶解していい表わされて居ると共に、それが句読に到りて立止りて憩うて居る。その交互の連続の間に統一の全体が在る。句の上に見る『飛ぶ』作用の中に少しく『止まる』姿を撰統詞や助詞の上に眺められる。それ等の『飛ぶ』ことと『止まる』ことの連続の中に、交互間の関係が常に翔つて行く。句と句との連続から我々の意識し得るところはその形でなくしてその飛翔の姿を見る。ゼームスが、それは唯、こゝそこに *Substantive starting Points, Turning points, Conclusions* を見るのみであるといつたように、文の内面に動く意識の連続の姿は文字の形に上ると否とにかかわらず記号の内に連続する飛翔の波形である。」(有朋堂版「国語の力」二 文の形 一三 意識の飛翔 一一六)

5₂ 「更にゼームスが特にその三点を示したことは、『言語の *Inner utterance* の着眼点を指示する親切なる助言である。』(有朋堂版「国語の力」二 文の形 一三 意識の飛翔 一一七)

5₃ 「ゼームスが意識の流れを小鳥の生活に比した時に、意識の飛翔の中に含まるゝ次の意味と前の意味との関係は、その止まる時

に一層深く現われて来ると云った比喩的の説明に於て、小鳥が枝に止まって、いづれの方に向つてか飛び去らんとする姿勢に比すべきものは關係を示す言語である。」(有朋堂版「國語の力」三 言語の活力 七 言語の可動的定着性 一四二六)

5 「ジュームス教授は、彼の文に關する心理学を彼の意識に關する見解の上に基礎づけて居る。彼の見解の下に於ける意識は『継続的断片の質に於ける、急激なる対象に依つて、割れ目が作られる』ところの過程の継続的流れを意味する。意識は吾々に、事物を認めしめる。

而して事物は、分立し不継続的であるが故に、『屢々熾烈の現出をなしつつ、そして互に對 (twin) にならしめつつ、連続して吾々の前を通過するのである。』しかし之等のものは、感情の継続、肉体的感覺等と共に、之等のものを考へるところの思考の流れを破るものではない。

然し乍ら外觀上の破綻はある。之は實際に『他動的個所』速かなる流の個所、一つの實質的休息個所の棒から他のそれへの飛行の個所である。——思考が感覺的像中で、混められるところの場所、或は恐らく結論に向つての飛行の個所、即ち意識生活は、小鳥の生活の如きものである。飛び立つこと、棒にとまる事との二者択一からなっている。『言語の韻律は、この事を表現している。即ちその場合には、各思考は文の中に表現せられ、而して各文は、ピリオドに依つて閉じられる。』

飛行の個所は、動的又は靜止的の關連の考に依つて滿される。その關連は比較的休止の間に考えられた事物の間に於て得られるものである。吾々の思想及び文は、大部分之等の一時的な過渡的過程か

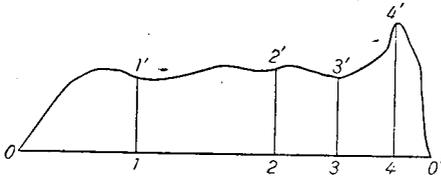
ら作られて居るので、斯くて内省する事は極めて困難なものとなる。」(木下一雄訳著「ヒューイ説方の心理学」第六章第五節 文の本質 一四四—一四五六)

5 「文法的意味をなすところの或文を説むに當つて、其他に意味其れ自身に關する感覺が下に横たわっている。そして之は文が物語るところのものよりは全然獨立せるものである。ジュームス氏が云つて居る如く『或る種の言語的聯想、滿されたる或る文法的予想は、文が意味を有すると云う吾々の印象の大部分を示すものである。……文法的形式に於ける無意味なる事柄は、半ば合理的に響く。文法的關連に關する感覺は、音を無意味なものにしてしまふのである。』吾々の説書に於て屢々吾々は、可成りの範圍に亘つて、この感覺的意味の感情に満足するのである。恰も無意味なる事の意味を聞きつゝ子供が半ば理解されたる事柄を有頂点なる注意を以て聞く様に。『彼等の思考は、吾々の思考が速である場合に於けると同様な形態にある。両者とも、言われたる文の大部分の上を飛ぶのである。そして吾々は僅かに實質の出発点、転向点及び諸々の結論に對してのみ注意を向けるのである。』(1) (2) James, Psychology, Vol. I, p. 265—266 (木下一雄訳著ヒューイ説方の心理学」第八章第六節 説方と意味の意識 一九〇六)

6 「ジュームスが、ある思想を發表する前に心の中にいわんと欲する意向の形が見える。その流れを一つの図表を以て現わせば、始の方より終の方が高くなつて、その間に主なる部分が隆まりつゝ連続する形として見ることができると述べて居る。」(有朋堂版「國語の力」四 文の律動 六 内辭の聴き方 (一) 一八八六)

6 「文の各部分が、発音せられる時に感じられる全体的統一とし

第十九図



て文を見る場合に於て、そして発音に先行する意識内に幾分存在して居る全体的統一として、文を見た場合に於て、ジェームス氏はヴント氏と見解を同じくして居る。即ちジェームス氏は言っている。「吾々が話す為に口を開く前に於てさえも、其の文を云わんとする意思の形に於て、全思想が吾々の心の中に現れているのである」更に「其の文の最後の語が話された後に、吾々は吾々が内面部にその完成されたる意見を表現する時に、其の全内容を再び考えるものであると云ふ事を全ての人は認めるであらう。」茲に示すジェームス氏の図解は、「The pack of cards is on the table」と云う文の発音を通じて生ずる意識の進歩を示しているものである。水平線は時間を表わし、上の空間は之の時間内に於ける意識内容を表すのである。文の全部的思想が、その文の最初及び最後に現れるのみならず、又図解の他の部分を通じて作られたる全ての垂直的部分は、文の意味を感じずに當つての他の方法に依つて相互に満されるであらう。

例えは

2を通じてはカードは、心に最も強められて現れる目的物の部分であらう。それから4を通じては、テーブルが最も強く現れるところの部分である。この流は其の初めよりも、其の終りに於て高く描いて居る。何故かなれば、内容を感じる最後の方法は、最初の方法よりも、より豊富であるからである。デューベルト氏が云っている如く「吾々は、吾々が

云わんと意味して居るところのものを、吾々が云ってしまった後に於てのみ知り得るのである。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第五節 文の本質 一四七—一四八)

(6) スタウト、ブレイヤー、スウィートらから

1 「スタウトの黙会Implicit apprehensionの如き作用に依りて、説方の自然な作用に於て心の面前に現れるものは文の文意Total meaningである。それから文の部分の継続的表現が意識に上ると見ることが出来る。文に面して最も直接的に接触するものは文の全一なる統一である。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二四 解釈の着眼点(一)六七)

1 「故にスタウト氏はImplicit Apprehensionと云う名で『部分の識別なくして生ずる全くの理解』と云う事を彼は暗示して居る。殆んど全ての語は、多くの個別を代表する概念全体を代表するものである。単一なる名でさえ幾分複雑であるので、個人の歴史に於ける異りたる局面を代表すところの全てを代表して居るのである。スタウト氏の全議論に於ける主眼点は、かゝる代表的全を『その分析的詳細な事柄の全部或は或るものを識別することなしに、その統一及び明確の内』に考へる事は可能であり、普通であると云う事である。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学第八章第四節 意味の注釈 一八四)

2 「ブレイヤーが子供が叫んだHot(あつい)という辞の中にはThis drink is too hotの意味を見ると解する時に、この一語が克く一文を現わす力があると感ずるのは、単にこの一語意の辞彙的解釈ではなくして、この一語の有する意味を内聴したからである。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 二六 解釈の着眼

点(三)七四六)

2 「例えばブレイヤー氏の子供が彼のミルクのコップを速に下に置いて、そして『熱い!』と云った如きものである。この一つの語は『この飲み物は熱過ぎる』と云う事を意味するものであった。ブレイヤー氏が云つて居る如く、それは『一シラブルの中に於ける全部の主題』である。『この飲物は熱過ぎる』と云う事を暗示し、そして話された時に意味の全部を浸すところの意味は、僅かに少しの言葉しか知らなかったこの子供にとっては、その表現として『熱い』と云う一語に依つて暗示されたのである。」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第三節 発語の性質 一三八六)

3 「又声音学的言語学派の人々、たとえはスウィートが文を『音群』と解し『言語を適切に分つのは、呼吸群で切ることである』という意味は、一つどきの音群から次の音群へ移るには、其の間に一呼吸が要せられるからである。」(有朋堂版「国語の力」

一 解剖の力 二六 解剖の着眼点(三) 七五六)

3 「英国の言語学者であるスウィート教授は、彼の著発音学入門書(Primer of Phonetics)に於て言つて、『言語の中に實際的になされる只一つの分割は、呼吸の群(breath-groups)への分解である。吾々は肺の中に於ける空氣の存在量、新らしくする事なしに、継続的に或る数以上の音を発音する事は不可能である。之等の呼吸の群は、部分的には文への論理的分割に相応する。各文は必然的に呼吸の群である。しかし各々の呼吸の群は、必ずしも完全なる文ではない。』」(木下一雄訳著「ヒュエイ説方の心理学」第六章第六節 発語の生理 一五三六)

以上、ヒュエイの書物からの引用と目されるものを掲げた。これを、
「国語の力」の内容に即して見れば、

- 一 解剖の力(1)の1、(2)の1、(5)の1、(5)の2、(5)の3、(5)の4、(6)の1、(6)の2、(6)の3、(6)の4
 - 二 文の形 (3)の1、(3)の2、(5)の5、^{1,2}
 - 三 言語の活力 (5)の5
 - 四 文の律動 (1)の2、(4)の1、(4)の2、(4)の3、(4)の4、(5)の6
- のように引用され、一 解剖の力 四 文の律動 に集中している。ヒュエイの語を引用しているものは、二 文の形 には見られなかったが、ヒュエイ以外の引用は、三例もなされている。これらの引用を、ヒュエイの「ヒュエイ説方の心理学」に即して見れば、
- 第四章 (3)の1(4)の4、4の5)、(3)の2(4)の4)
 - 第六章 (1)の1(6)の6)、(1)の2(6)の6、(2)の1(6)の2)、(5)の1(6)の4)、(5)の2(6)の5)、(5)の3(6)の4)、(5)の4(6)の3)、(5)の5(6)の5)、(5)の6(6)の5)、(6)の2(6)の3)、(6)の3(6)の6)
 - 第八章 (5)の5(8)の6)、(6)の1(8)の4)
 - 第九章 (4)の1(9)の2)、(4)の2(9)の4)、(4)の3(9)の2、9の3)、(4)の4(9)の1) (注、かつこの中、9の1は、第九章第一節を示している。)
- のように引用されている。主として、第六章 説書の内部的発語及び

発語の精神的物理的特質、および第九章 読書の速度 から引用されている。ヒューイの引用に比べると、第四章 読書中に於ける視覚の実験的研究、第八章 読まれるもの、相互的關係及び意味の性質 からの引用が新しくなされている。

右に見たように、引用者は、1 スクリプチュア、2 エッジャー、3 ツアイトラー、4 ゴールドシャイダー、5 ミュラー、6 クアンツ、7 デイヤボロン、8 アベル、9 ヴント、10 ゼームス、11 スタウト、12 プレヤー、13 スウィートらに及んでいて、それぞれ所論にふさわしく用いられている。

これら一三名にも及ぶ人たちの引用がヒューイの「説方の心理学」にのみ負うているとは、にわかにはいえない。一つ一つ、出典が示されているわけではなく、またヒューイのそれに拠ることとわってあるわけでもないからである。ただ、引用箇所や引用のしぶりからすれば、ヒューイの「説方の心理学」に負うている面は、かなり大きいのではないかと考えられるのである。

それにしても、自在な引用であり、縦横の活用というべきであろう。それぞれの所論・叙述の要点をよく理解し、その適切な活用が意図されていて、その成果もあげられている。基本的な考えかたからも、資料の面からも、ヒューイの「説方の心理と教育」は、「言語の力」の成立に大きく寄与していると考えられる。

(昭和37年5月4日稿) (本学助教授)